

11月14日、カナダ大使公邸で論文コンテストの入選者表彰式が行われた。左から、高島外務次官、権田さん、ランキン大使、内野さん、近藤日加協会会長。



を流すという。これは、他の学校についても同様らしい。また、政府の刊行物や施設などには、カエデのマークと、英仏両語の表示が並記されているようだ。日本人は、団結を日本人であることの中に求めているようなところがあると思うのだが、多民族国家のカナダ人は、団結をカナダの象徴であるカエデの国旗に求めているのだろうか。

日本の二十七倍もの広さ、東西の幅が

北海道から九州までの三倍余という途方もない距離、同じ国の中で、七つの時間帯——と並べてみたところで、まだ見ぬ私には、いくらガイドブック、写真集をひっくり返してみても、カナダの自然がいかに雄大なかは本当には理解しえない。ただ、その自然の壮大さを知ることなしには、カナダという国を、カナダ人を知ることはできない。北海道の景色をすべて十倍の広さにおきかえて……と言われても分らない。とうとう兄は「太平洋側の砂浜に立って、見える海全体を淡水の湖と思い、次に小麦畑と思い、また草原と考えてみる。そんな広がりがあるのがカナダなのだ。わかったか!」と書いてきた。こんな雄大な反面、都会でも少し大通りを外れ、公園の小径を歩けば、鳥の声がし、リスが足元を横切り、少し郊外へ出ればうさぎや、時には鹿の影すら見えるという。いわば自然の中に、人間が文明を築くに充分なだけの広さがある国、人類が未だ足を踏み入れたことのない地域が残っている国、それがカナダであろう。馬鹿馬鹿しいとは思いますが、太平洋に向かって立った私は、その広がりも実感に近いものとして迫って、その途方もない大きさに驚いたものである。

普通、日本と西洋の自然に対する関わり方を評して、「日本人にとっては自然は共存すべきものとしてあり、西洋人にとっては征服すべきものとしてある」と言われる。しかし、前述のような、自然の中に人間が文明を共存させているようなイメージ、そして厳しい自然保護の姿勢が

らすると、少なくともカナダ人にとって、自然は欠くべからざるパートナーとして存在するのではないかと。『西洋人にとっては……』という言葉は、カナダ人には当てはまらないのではないかと思える。もちろん、「共存」の内容は日本のものと異なるにしてもである。いやむしろ、よほど「自然との共存」を重視し、実践しているのではないだろうか。

近代国家としてのカナダの重要な骨格をなすものが、この雄大な自然に支えられた豊かな資源であることは疑いない。カナダは、日本にとって石炭、小麦、木材、鉄鉱石、食肉、製紙用パルプなどの重要な供給源である。逆に日本からは自動車、電子製品、鉄鋼などの工業製品の輸出が多く、両国は補完関係をなしている。カナダは、その豊富な資源を背景に、経済の中に貿易が占める割合が高いのだが、そのうち七割は対米貿易、そして国内の主要産業のうち七割が外資系（多くは米国系）に支配されている。話が横道にそれてしまったが、カナダが資源の国であるということ、そして産業が米国の強い影響下にあるということも、私なりにカナダを知るのに必要なことがらだと思ふ。特に後者は、前に述べたアメリカ人への対抗意識に随分関係があると思われる。

正直言って、知れば知るほど、考えれば考えるほど、私のカナダ全体へのイメージは漠としてしまいうような気がする。全体を捉えようとする、個々(例えば複